

続・道徳（科）における教材論と授業論のこれまでとこれから

第5回オンラインセミナー

「続・道徳（科）における教材論と授業論のこれまでとこれから」をふりかえって

谷田増幸（兵庫教育大学）

日本道德教育方法学会主催による第5回オンラインセミナーが「続・道徳（科）における教材論と授業論のこれまでとこれから」のテーマのもと、2022年10月10日（月：祝）17:00から行われました。

昨年度は馬場勝会員（文部科学省）による「道徳（科）における教材論と授業論のこれまで」と題しての講演、それを受けての1時間半ほどの対談や意見交流が行われましたが、今年度はさらにその続編を企図したものでした。少しだけ昨年度のことを思い出してみますと、馬場会員からは、①「道徳科教科書」の成立過程やその特質についての考察、②「食材と料理のアナロジー（Analogy）モデル」を用いての「教材」のつくりに係る提案、③縦軸に「道徳を教える内容の正当性」、横軸に「道徳を教えることの可否」を示した「4象限モデル」からテーマについて俯瞰的に捉えようとする提案がありました。みなさまにとってもまだまだ記憶に新しいことかと思います。（詳細は昨年度の報告をご参照ください）。

こうした馬場会員による教材論や授業論についての考察や提案を踏まえて、今年度は道徳科の内容論や方法論へと深く分け入っていくために、具体的な教材を「窓口」としながらさらに検討を加えていくこととしました。ここでは当日そのあとのような流れでオンラインセミナーが進められたか、簡単に振り返ってみたいと思います。

- (1) 最初の基調提案では、杉中康平会員（四天王寺大学）より「代表的な教材「二通の手紙」を通して考える教材論（授業論）」と題してご発表をいただきました。杉中会員のご提案から私が印象に残ったことは、①国語科との対比における道徳科の「読み物教材」の特徴、②「二通の手紙」に込められた教材の魅力、③「二通の手紙」の授業と「問題解決的な学習」との関係（そもそも「二通の手紙」のねらいとは？）、④「規則そのものの意味」を問う磯部一雄会員（札幌市立平岡緑中学校）による実践の紹介などでした。たくさんさんの授業実践を見て来られた杉中会員らしい熱のこもった歯切れのよい（具体的な処方箋を含めた）論を展開していただきました。
- (2) 次の基調提案では、白木みどり会員（金沢工業大学）より「道徳授業観に基づく「二通の手紙」作成の背景」と題してご発表をいただきました。「二通の手紙」の作者でもある白木会員のご提案から私が印象に残ったことは、①「二通の手紙」作成の意図、②教材作成のポイントや配慮事項（「整合性がほころぶ落とし穴」）、③「解雇処分」から「停職処分」への記述変更、④多様性から「議論の種」を拾うことと「思考課題の設定」などでした。「世界は、矛盾にあふれている」からこそ、教材には「共通性の確保と多様性への対応」が求められるものと私は解釈しましたが、それでよろしかったのでしょうか。教材作成の根底に一人一人の「子どもの思考」を大切にされようとする白木会員の教材づくりや授業づくりに対する繊細さと懐の深さを感じました。
- (3) これらの提案を受けて、堺正之会員（九州女子大学）に指定討論者としてご登壇いただきました。指定討論の柱は、①「教材「二通の手紙」について」、②「道徳科教科書に多様な価値観を反映するには」でした。特に「二通の手紙」にかかわって、第三者である話者を通して語られる「本教材の物語の特質」（あるいは前提）について「解釈の多様性」との関係で一つの貴重な論点をご提示いただきました。教材と内容項目「遵法精神、公德心」との関係や道徳科教科書の在り方についても今後検討すべき重たい課題をいただきました。

その後の座談会及び質疑応答は、堺会員からの論点に対する杉中会員、白木会員の応答を中心に進められました。その過程で、第2回オンラインセミナーや当日の議論を踏まえ、馬場会員からもこれまでの「読み物資料」と「教科書教材」との共通性や異質性の観点などから鋭いご指摘もありました。

私自身も日ごろの様子を振り返ってみれば、道徳科の授業が教育課程の上に定着しつつあるなかで、道徳科の「内容論」と「方法論」に挟み込まれる形で「教科書教材」をより自明のものとして受け止め、その実践を眺めている現状があります。けれども、この代表的な教材「二通の手紙」を「窓口」として考えるだけでも、道徳の「内容（項目）」と教材の関係、「内容（項目）」と指導方法の関係、教材と指導方法の関係など、それらは微妙なバランスを取りながら漂流しつつある船のようにも思われました。ある寄港地に繋ぎ止めることを必ずしもよしとはしませんが、教材「手掛かり論」の是非（？）と道徳科目標論の変容（？）へと遡行してしまう自分がそこにはありました。

参加者は、60名あまりで、そのうち23名からアンケートのご回答をいただきました。今回のオンラインセミナーについて「非常に満足した」が21名、「満足した」が2名、今回のオンラインセミナーの内容で自身の実践や研究等に役立つところが「非常にあった」が20名、「あった」が3名でした。このアンケートの結果を踏まえ、さらに改善・充実を図っていきたいと考えます。なお、チャットでのコメントやご質問もいただきましたが、その場で十分に反映させることができませんでした。それについても今後の課題とさせていただきます。

最後に、参加者からいただいたコメントをいくつか紹介させていただきます（一部省略あり）。

- 杉中先生の深い教材解釈、白木先生の教材作成の重要性、堺先生のさまざまな視点がとても勉強になった。
- 先生方の話をお聞きし、そんな考え方があるんだと、びっくりでした。私は、規則も思いやりも大事でどのように発問をしたらよいのかと、唸ってしまいました。深いなあと思いつつあつという間の2時間でした。白木先生の多様性から議論の種を拾うというお言葉が心に残っています。
- 教材の原作者を交えての座談会で、論点がはっきりしていてとても充実した内容でした。とても勉強になり、深い思考を求められる時間でした。
- 内容項目が授業者のねらいではなく「手がかり」であるという点について、関係者（研究者、実践者）の理解に差があることが今更ながら確認することができました。
- 内容の深い解釈をきちんとしないといけないと思った。ねらいを大切に、さまざまな方法論、発問を試してみたいと思った。
- 教材研究をした授業者が子どもの考えを整理し、何をどのように問うのかによって、教材を活用できるかどうかが決まることです。そして、このような授業者（教員）を育てていかなければならないと考えたことです。
- 安易な方法論の話ではなく、理論と実践からの深みのある話で学び応えがありました。特に一つの教材にフォーカスしていたので具体と抽象を往還させながら聞くことができました。
- 教材活用論（授業論）、教材論、教科書論への言及がありましたが、それらを包括した教科内容論についてみなさんがどう考えているのかをお聞きしてみたいと思いました。

多くの会員のみなさまにご参加いただきましたこと、またこのセミナーの開催に当たって関係のみなさまに多大なご尽力をいただきましたことに、担当者としてこの場を借りて厚く御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

今回のセミナーで提案させていただいた概要を以下にお示しします。

1. 全ての前提として了解しておくべきこと～道徳科における教材論は教材活用論（授業論）である～

国語科の授業においては、作者の主張や登場人物の心情をしっかりと読み取ることが求められます。つまり、国語科の教材論は、「教材をどのように解釈するのか？」という「教材解釈論」に重点が置かれているといえます。一方、道徳科の授業では、本時のねらいとなる「内容項目」（＝道徳的価値）に子どもたちがしっかりと向き合うために、「教材をどのように活用するのか？」という「教材活用論」が主となります。つまり、道徳科の教材論は、「どのような授業をするのか？」という「授業論」に直結しているということでもあります。

2. 名作「二通の手紙」の魅力とは？

「二通の手紙」が世に出て、既に20年以上が経過しています。これまでに多くの副読本に掲載され、『私たちの道徳』の掲載を経て、現行の中学校道徳教科書の8社全てに掲載されています。この事実からも、「二通の手紙」が「名作である」ということに、異論がある方は少ないのではないのでしょうか。

「二通の手紙」は、主人公の「元さん」の思いに「感情移入」しやすく、生徒が自分事として（＝自我関与）考えやすい作品であるといえます。しかし、「名作」なるが故に、「規則」や「ルール」に対して、日頃から「窮屈だ」「うっとうしい」と考えがちな中学生が、教材に仕掛けられた数々の罠（トラップ）に引っかかってしまう危険性も多分にある「迷作」であるともいえます。

名作「二通の手紙」に仕掛けられた数々の罠

- ① 「否定」し切れない元さんの優しさ
- ② お母さんからの「感謝」の手紙と動物園からの「懲戒処分」の通知（＝相反する2通の手紙）
- ③ 元さんの一見不可解な言動（＝晴れ晴れとした表情で、自ら職場を去る）

3. 「二通の手紙」でどのような授業が可能か？

これまで、「二通の手紙」は、主人公「元さん」への自我関与が中心の展開で行われることが多かったと考えます。

主人公（元さん）への自我関与中心の展開の代表例

- 問1：（元さんの「道徳的課題」を問う） 元さんはなぜ、姉弟を動物園に入れたのか？
- 問2：（元さんの「気づき」を問う） 元さんが「晴れ晴れとした顔」で自ら職を辞したのはなぜ？
- 問3：（元さんの生きざまからの学びを問う） 今日の授業を受けて気づいたこと・学んだことは？

この教材で陥ってはいけないのは、温かい「規則破り」VS 冷たい「規則順守」という構図です。しかし、元さんが幼い姉弟に同情して、ついつい「入園」させてしまった「過ち」に対して「共感」し、感動すらしている生徒たちが、この授業のねらいである「遵法精神」にまで行きつくのは容易ではありません。

また、近年、いわゆる「問題解決的」な手法で展開する授業も増えてきています。

「問題解決的」展開の代表例

- 問1：（元さんの「行動」の賛否を問う） 姉弟を入園させた元さんを支持しますか？（賛成 or 反対）
- 問2：（元さんの取るべき「行動」（方法）を問う） 元さんはどうすべきでしたか？
- 問3：（自分（生徒）が実際に取るべき行動を学ぶ） 自分が職員になったつもりで「ロールプレイ」する

そもそも、わずか50分の道徳科の授業で、「賛成」「反対」を自由に論じて、その議論を十分に回収することは可能なのでしょうか？ しかも、授業の前半で自由に（オープン）に論じ合いながら、終末で動物園の職員として「断る」ことが前提のロールプレイをすることに「矛盾」はないのでしょうか？ さらに、「元さんはどうすべきか？」という、主題から離れた小手先の「方法論」を論じて、決して生徒の「遵法精神」は深まらないでしょう。

ここで、札幌市立平岡緑中学校教諭磯部一雄氏が提案している授業展開を紹介させていただきました。元さんの思いを「追体験（＝場面再現）」した後に、「規則そのもの」の意味を論じ合わせる展開です。

「規則」そのものの意味を問う授業展開

問1：（場面再現）「万が一事故にでもなっていたらと思うと・・・」に続く言葉を、再現してみよう。

問2：（規則そのものの意味を問う）動物園の「規則」とは、そもそも何のためにある？

問3：（この授業を通して学んだことの交流）今日の授業を受けて気づいたこと、学んだことは？

「そもそも動物園とはどんなところか？」「動物園の規則には、どんな思いが込められているのか？」を考えることで、読み物教材「二通の手紙」は、「遵法精神」について考える名作となり得ると考えられます。

「二通の手紙」が内包する多様な道徳授業観

白木みどり（金沢工業大学）

「二通の手紙」を執筆して、20年余の時間が過ぎました。その間、多くの学校や先生方が授業実践して下さいました。そして、そこには、教師の何十倍もの数の子ども達がいたことに思いを馳せると、感慨深く感謝の念に堪えません。

「二通の手紙」を題材に設定して頂いた今回のセミナーでは、道徳教材に関する知見や分析の視点、多様な指導法や指導者の価値観の相違等について、改めて熟考する機会を得ることができました。セミナーオープニングからまもなく、杉中先生の詳細で綿密な教材分析や指導方法に関する熱の籠もった基調提案に圧倒されるまでに時間は掛かりませんでした。僭越ながら私の提案を挟んで、その後の内容は、指定討論者の堺先生により専門のご研究分野から、さらに学術的議論へと発展させて頂けたと思います。コーディネーターの馬場先生は、昨年ご登壇されたセミナーでの内容を踏襲しての説得力あるお話をされ、特に教材の分析と分類には、感銘を受けるばかりでした。そして、名ファシリテーターの谷田先生からの鋭い指摘と質問に、質の高い議論が展開されました。ただ、限られた時間の中で、参加された皆様からのご意見を頂けなかったことは残念でした。しかし、教材を同じくしてもその授業観や指導方法は多様であり、マニュアル化された画一的な指導方法だけでは対応しきれない授業教材の複雑性を共有できたことの意義は大きかったのではないのでしょうか。以下に、「道徳授業観に基づく『二通の手紙』作成の背景」と題して基調提案させて頂いた内容の一部を紹介します。

私たち人間は、複雑に連関する複数の道徳的価値から、選択の判断を強いられる問題に直面します。「遵法や社会のルールを守ること」と「困っている人には思いやりの心で親切にする」こととの間には、必ずしも画一的な判断や行為の選択が成立するわけではないことは、周知の事実です。現実的社会における規則を介して主人公が選択した生き方から、理性と心情、社会と個人の関係について考え、遵法について原理追求することを意図した教材が「二通の手紙」です。ストーリーの中で通告される「停職処分」は、職場復帰を保障するにもかかわらず、主人公の元さんは、自ら職場を退きます。この選択は、元さんの生き方をより鮮明に意味づけます。これは、自らが納得のいく処分を自らに科すという判断であり、辞職は、元さんの価値観の象徴ともいえるのです。 【二通の手紙作成の意図より】

授業者は、分析を通してそれぞれの道徳教材が持つ特徴に応じて、指導方法を工夫することが求められます。子ども達が、道徳的価値を含む事象や登場人物の判断、行為について思考経験し、多様な価値観を共有し自己の判断の基準となる道徳的価値観を再構築していくステージが道徳授業だと考えます。子どもの思考は自由であるからこそ、自然な思考の流れから多様な意見が生まれるというメカニズムを大切にしたいものです。「道徳授業は、誰のためのものか」、その最も基本的な要件を満たすためにも、子どもの自由な思考や発言で、ねらいとする道徳的価値に繋がるような教材の開発が求められるのだと思っています。

子どもの自然な思考から生まれる多様な意見から「議論の種」をひろいましょう。

子どもの声に耳を傾け、対話を楽しみましょう。

あせらず、力まず、道徳授業を楽しみましょう。

道徳授業では、全ての子どもを花丸にしましょう。 【道徳教材観・道徳授業観より】

指定討論を務めて

堺 正之（九州女子大学）

当日は指定討論者の立場から、杉中会員と白木会員の発表に対する質問と若干の問題提起をさせていただきました。発言のほとんどは、教材文「二通の手紙」の終盤、元さんの姿に失望の色がなく晴れ晴れとした顔で身の回りを片付け始めたという場面をめぐるものです。質問の柱は2点

①この場面をどう読み取るか

②中学校の「遵法精神、公德心」にかかわるねらいをもった指導でこの場面を取り上げることは適切かです。

本教材では、物語の話者が登場人物の内面を語ることは強く抑制されています。その中で、過去の出来事を想起して語っているのは、登場人物である佐々木です。元さんの姿に失望の色がなかったこと、そして晴れ晴れとした顔で身の回りを片付け始めたことは、佐々木の目に映った元さんの様子についての描写であり、元さんの心の中が物語の語り手によって（すなわち事実として）語られているのではないため、ここは多様な解釈が認められてもよい場面ではないかという立場からの質問でした。関連して、授業でこの場面を取り上げることは白木会員のご発表にあった「思考課題」に耐えうるかについても質問させていただきました。

お二人からはご自身の主張をふまえた回答と説明をいただくことができました。ありがたく思うと同時に、中学校段階における「遵法精神、公德心」の学習に求められる内容は何なのか、という新たな疑問も生まれてきました。このほか、杉中会員のご発表にあった問題解決的学習への批判については同感するところが多くありました。その上で、仮に解決策を出し合ったら、そのあと何をしなくてはいけないか、磯部会員の実践にからめて自身の意見を述べたのですが、この点は十分にお伝えすることができませんでした。

最後に、個人的な願望を込めて「多様な価値観を反映する教科書」について質問させていただきました。杉中先生から「まさに、このようなセミナーに参加して論じ合うべき」との回答をいただくことができて、たいへん心強く感じました。どうすれば教科書を用いる道德学習が児童生徒にとってのメリットにつながるのか、これからも考えていきたいと思えます。どこかで延長戦ができればいいな、と久しぶりに思いました。夕刻からのセミナーだったこともあり、コロナ前の研究発表大会第1日終了後のような気分を味わうことができました。

第5回オンラインセミナー報告

馬場 勝（文部科学省）

第5回オンラインセミナーのコーディネーターとして、セミナーの構想を本年4月から谷田増幸会長にご教導いただきながら話し合いました。そこでは、「第2回オンラインセミナー（2021年11月28日）とどう繋いでいくのか」ということを課題としました。

第2回オンラインセミナーでは、多くの参加者の方々から貴重なご示唆をいただき、「相対的（俯瞰的）に見ることの大切さ」がクローズアップされました。この点については、杉中会員の基調提案では、教材の本質を踏まえた多様な教材へのアプローチという、授業方法の相対化の大切さを具体的な実践例を示しながら述べられました。また、白木会員の基調提案では、「共通性の確保と多様性への対応」をキーワードに、教材内容や授業方法の相対化の重要性について言及されました。さらに、指定討論者である堺会員のご提言を基に、教材の解釈論と活用論などに関する議論が展開され、道德に係る授業論・教材論を多角的な観点から俯瞰することができました。その結果、「教材を窓口として道德授業について考える」という第2回オンラインセミナーの基底が生かされつつ、実践上の重要な観点からの議論に発展したことは、今後の議論の展開に繋がる大きな成果であったと考えます。

2つのオンラインセミナーを通して、道德教材に関する議論の際に留意すべき点が気になりました。それは、「道德教材（読み物など）」と「道德教科書教材（読み物などを中心に発問等を明記したもの）」の差異についてです。前者は、従来からの道德授業で用いられる教材（資料）そのものであり、道德授業活用を企図して作成され一定の授業論が（意識的または無意識的に）組み込まれたものと、エッセイや新聞記事などの全部や一部をそのまま掲載したものに大別できます。一方、後者は、前者に発問、学習の手引きなどがある程度「パッケージ化」されたものです。今回の議論では、前者の活用を前提に議論が進められましたが、実際に目の前にある道德教材は後者であり、授業者が「道德教科書教材」を「道德教材」として活用する際には、そこに内在する道德の内容や方法（授業論）を読み解くことが求められます。その意味でも、道德の授業論、教材論の双方向的な考察や議論がさらに進展していくことが重要であると考えます。